

## 事業成果報告書

<b>1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)</b>
女性作曲家会議 (代表者名: 森下周子)
<b>2. 研究または活動のテーマ(課題名)</b>
日本現代音楽界における男女機会不均等の調査研究 ～ 日本人女性作曲家のこれまでと現状 ～
<b>3. 助成額</b>
500,000 円
<b>4. 実施期間</b>
2019 年 7 月 ～ 2021 年 1 月
<b>5. 実施状況</b>
<b>【2019 年】</b> 7 月 研究開始 9 月 シンポジウム開催(於下北沢ハーフムーンホール) 10 月 国際学会(SGFA)で発表
<b>【2020 年】</b> 3 月 国内学会(JSSA)で発表 4 月 シンポジウム(於 Shibaura House)が Covid-19 拡大の影響により開催中止に →のちに 2020 年 7 月の延期開催が決定 4 月 オンラインで勉強会、ワークショップを開催 5 月 出席予定の国際学会(FoS)が中止に →のちに 2021 年 1 月の延期開催が決定 7 月 シンポジウム(於 Shibaura House)が Covid-19 拡大の影響により開催中止に →のちに 2020 年 12 月の延期開催が決定 11 月 出席予定の国際学会(EMS)が中止に →のちに 2021 年 11 月の延期開催が決定 12 月 Covid-19 再拡大によりシンポジウムの開催を断念 →代わりにオンラインで開催

【2021年】

1月 Covid-19再拡大により国際学会(FoS)再中止  
→代わりにオンライン発表を行う

## 6. 事業成果と自己評価

女性作曲家会議は現代音楽作曲家を中心としたコレクティブである。当該領域において日本では未だ男性優位主義が色濃く、ジェンダー問題を語る機会も著しく少ないことが問題であると考え、2019年より活動を続けてきた。

現代音楽研究は「器楽音楽」と「電子音楽」の二つに大別されるが、本リサーチを進めるうちに「電子音楽」分野におけるジェンダー研究がこんにちでも未開の領域であるということが明らかになってきた。特に女性作曲家に関するデータが僅少であり、意図的に隠蔽されたケースも少なくない。

海外に目を向けると女性音楽家や芸術家のデータ掘り起こしは近年さかんになっている。筆者らは中でもソルボンヌ大学を拠点としたフランス・台湾・日本の共同研究グループに目をつけた。データを蓄積していくことで可視化に貢献するという、いわばデータベースによるエンパワメントを行なっている。同様の活動を行う団体は欧米を中心に散見され、しかし上記規模のものはアジアでは他に存在していない。筆者らの手で日本人女性作曲家(音楽家)のデータ集積を行い整理・公開することは、ネットワーク強化という観点においても意義深いと思われる。当該機関と連携のあり方をはかりながらデータベース作成に向けた取り組みを行なうことは、本研究を通して得られた今後の目標である。

研究においては文献など他者が記録したデータを集めることと並行して、塩見允枝子、志田笙子ら、さまざまな世代の女性作曲家のインタビューを行った。特に興味深く思われたのは、戦後世代の女性が口々に「アートに性差はない。男性が優遇されるのは(あるいは女性が優遇されないのは)確固とした理由が認められるからであって、格差というのは特に意識したことがない。」と述べていたことである。これは個人意見というよりも社会背景を反映した思想であると思われる。時代ごとの分析・精査は今後の重点目標として検討される。

研究成果発表の多くは、先端芸術系の学会(先端芸術音楽創作学会、Fragility of Sounds、EMS、SGFA、TAMA等)にて行った。テクノロジーの進化とともに発展した新しい学問領域に身を置く研究者からは柔軟かつ好意的なレスポンスが多く、支援のことばが多く聞かれたことは励みになった。ジェンダー視点で研究を行う者が国内にほぼ存在しない現状について、憂慮されていたことがうかがえた。

ただし研究期間の大半が Covid-19 拡大の時期と重なったため、学会出席やシンポジウムの開催を断念あるいは形を変えて行うこととなり、さらには、研究機関に出向いての資料集めにも大きな制限がかかるなど、折衷案を模索しながらの計画実施は容易ではなかった。特に国際学会の中止や度重なる延期により研究が思うように進められなかったことが悔やまれる。

今後は本研究を通して見出された次の目標に向かって研究準備を進めながら、国内外への発信を強化し、さらに大きなムーブメントにつなげていきたい。最後になるが、本研究を支援いただいた竹村和子フェミニズム財団に深謝申し上げます。

## 7. 提出成果物

論考①

論考②

イベント開催のお知らせ(ちらし)

国際学会発表原稿全文